



Classification of Caregiving Families according to the Family Caregivers' Appraisal Checklist

Horiguchi, Kazuko

(Degree)

博士 (保健学)

(Date of Degree)

2013-03-25

(Date of Publication)

2013-08-05

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5833

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005833>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文審査の結果の要旨

氏名	堀口 和子		
論文題目	Classification of Caregiving Families according to the Family Caregivers' Appraisal Checklist (家族介護生活評価チェックリストに基づく介護家族の類型化)		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	教授	松田 宣子 印
	副査	教授	法橋 尚宏 印
	副査		
副査			印
要 旨			
<p>本研究は、在宅介護の継続を評価する目的で開発された家族介護生活評価チェックリスト(FACL; 参考論文: 堀口ら, 2013)に基づいて、在宅介護家族を類型化し、その特徴を明らかにすること、ならびに在宅介護期間に影響を及ぼす要因の探索を目的としている。対象は全国訪問看護サービスを利用している要介護者のFACLを含む質問紙調査票に回答が得られた1,020家族(回収率79.8%)のうち、959家族の類型化を試みた。FACLは、介護家族の「生活と介護のバランス」、「緊急事態への心積り」、「家族介護肯定感」、「家族介護充足感」、「介護に対する経済的余裕」、「十分な介護サービス」、「在宅介護の受容」の7側面(15項目4段階評定)を多角的に評価するツールである。類型化には、FACL各側面得点を標準化した後、階層的クラスタ分析(Ward法)を用いた。得られたクラスタと対象の属性・介護様態との関連には分散分析・χ^2検定を用いた。また、ステップワイズ回帰分析によって、介護期間と関連する要因の探索も行った。介護家族は6クラスタ(A~F)に分類された。クラスタA(約13%)は全側面が最高値である「全体高群」、B(34%)は全側面が平均的な値である「平均群」、C(21%)は介護サービスのみが低い「介護サービス低群」、D(16%)はどの側面も平均値以下で、特に緊急事態への心積りが顕著に低い「緊急対応低群」、E(11%)は全体的に低値だが介護サービス・緊急事態への心積りが顕著に低い「緊急対応低群」、F(5%)は緊急事態への心積り以外が著しく低い「全体低群」であった。FACLにより、介護生活継続に必要とされる家族の認識や対処行動のうち、不足している側面が明確になる可能性が示唆され、家族看護支援に有効な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。</p> <p>よって、学位申請者の堀口和子氏は、博士(保健学)の学位を得る資格があると認める。</p>			
<p>Classification of Caregiving Families according to the Family Caregivers' Appraisal Checklist・Kazuko Horiguchi, Noboru Iwata, Nobuko Matsuda・Kobe journal of Medical Sciences 58(5)、2012(掲載予定)、</p>			

論文内容の要旨

専攻領域 看護学

専攻分野 家族・在宅看護学

氏名 堀口 和子

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を()を付けて併記すること。)

Classification of Caregiving Families according to the Family Caregivers' Appraisal Checklist

(家族介護生活評価チェックリストに基づく介護家族の類型化)

論文内容の要旨 (1,000字~2,000字でまとめること。)

【目的】本研究は、在宅介護の継続を評価する目的で開発された家族介護生活評価チェックリスト(FACL; 参考論文: 堀口ら, 2013)に基づいて、在宅介護家族を類型化し、その特徴を明らかにすること、ならびに在宅介護期間に影響を及ぼす要因の探索を目的とした。

【方法】対象は全国層化二段階抽出した訪問看護サービスを利用している要介護者の1,279家族で、FACLを含む質問紙調査票に回答が得られた1,020家族(回収率79.8%)のうち、959家族の類型化を試みた。FACLは、在宅介護家族への面接から抽出した介護生活継続を可能にする家族側の認識と対処行動の要素を基に開発したもので、すでに個人レベルの尺度の測定次元との類似性・独自性が確認されている(参考論文: 堀口ら, 2013)。FACLは、介護家族の「生活と介護のバランス」、「緊急事態への心積り」、「家族介護肯定感」、「家族介護充足感」、「介護に対する経済的余裕」、「十分な介護サービス」、「在宅介護の受容」の7側面(15項目4段階評定)を多角的に評価するツールである。

類型化には、FACL各側面得点を標準化した後、階層的クラスタ分析(Ward法)を用いた。得られたクラスタと対象の属性・介護様態との関連には分散分析・ χ^2 検定を用いた。また、ステップワイズ回帰分析によって、介護期間と関連する要因の探索も行った。

【結果】介護家族は6クラスタ(A~F)に分類された。クラスタA(約13%)は全側面が最高値である「全体高群」、B(34%)は全側面が平均的な値である「平均群」、C(21%)は介護サービスのみが低い「介護サービス低群」、D(16%)はどの側面も平均値以下で、特に緊急事態への心積りが顕著に低い「緊急対応低群」、E(11%)は全体的に低値だが介護サービス・緊急事態への心積りが顕著に低い「緊急対応低群」、F(5%)は緊急事態への心積り以外が著しく低い「全体低群」であった。

FACLの7側面すべてで、クラスタ間での有意な差異を認めた。要介護者の年齢・医療的ケア数、主介護者の年齢・仕事率・主観的健康率・介護相談者率はクラスタ間で有意に異なっていた。家族世帯様態・主介護者の続柄に差異は認められなかった。多重比較(Bonferroni)の主な結果としては、要介護者が受けている医療的ケア数は、クラスタC「介護サービス低群」の方がクラスタB・D・Eより有意に多いこと、クラスタF「全体低群」は主介護者の年齢が有意に低く、介護援助者率・相談者率も低値であることなどが認められた。

介護期間に関連する要因を属性(要介護者・介護家族)・介護様態およびFACLの中から抽出した結果、医療的ケア数・介護種類数・家族介護肯定感(FACL)・要介護度が介護期間と関連していた。介護の長期化により要介護者の医療的ケア数・要介護度は上がり、介護の種類も増えるという関係性を考慮すると、介護継続には特に家族介護肯定感(FACL)を高めることが重要であると考えられた。

【結論】FACLに基づき在宅介護家族を6群に類型化し、その特徴が明らかになった。FACLにより、介護生活継続に必要とされる家族の認識や対処行動のうち、不足している側面が明確になる可能性が示唆された。今後、縦断研究によってFACLおよび各類型の予測妥当性を検討する必要がある。また、各側面に対する適切な支援方略を構築していくことにより、訪問看護師をはじめとする専門職の支援の充実化が期待できるものと考えられる。

指導教員氏名: 松田宣子